

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここしばらく、蟻の姿などをのんびりと眺めるようなことはなかったなあ……と思っていたら、いま目の前をそうしたことを思いださせてくれるモノが行き来する。床の上を動きまわりながらホコリを吸い集めてくれる（お掃除ロボット）である。子どものころに戻って、その様子をしばらく眺めてみたい（ロボット技術は日々進化を I ている。不用意な誤解を避けるため、本書に登場するのは架空のお掃除ロボット（ルンル）である）。

電源スイッチらしきボタンを押してみる。すると、ピポッ、ピポッ、プーッ……という軽快な電子音とともに、それは動きだした。「さて、どこからはじめようかな……」とでもいったげに、クルリとあたりを見わたす。そしてひとたび狙いを定めると、クリーンと甲高いモーター音をたてて動きはじめるのだ。

ロボットは、テーブルの下や椅子のあいだをくぐり抜けながら、床の塵やホコリをかき集め、それを吸い込んでいく。ゴツンゴツンと部屋の壁や椅子などにぶつかるたびに、その進行方向をコキザミに変える。「それだけなのかな？」としばらく様子を眺めていると、なにか思い立ったように途中で方向転換をし、部屋の反対方向へと移動しはじめたりする。あるときは壁づたいに小さくコツンコツンと当たりながら、その隅にあるホコリを丁寧にかき集めていく。

この気ままなお掃除ぶりは、はたして効率的なものなのか。同じところを行ったり来たりとチョウフクも多そうだ。たぶん取りこぼしているところもあるにちがいない。それでも許してしまうのは、その健気さゆえのことだろう。

小一時間ほど走りまわると、ちょっと疲れたようにして自分の充電スタンドへと舞い戻っていく。そのすこし速度を落としての、小さく腰を振る。シヨサがかわいい。塵のシユウノウスペースに集められたホコリや塵の量を見て、思わず「ごろうさん、よく頑張ったね」と労いの言葉をかけそうになる。

① これまでの家電とはどこか趣がちがうようだ。そのロボットの動きを思わず追いかけてしまう。「どこに向かおうとしているのか、なにを考えているのか」と、その行く手をさえぎるなどして、いたずらをしてみたくなる。「a」すこし先回りをしながら、床の上に無造作に置かれた紙袋を拾い上げ、部屋の片隅にある乱雑なケーブル類を束ねていたりする。これもロボットのためののだ……。「あれれ？ これでは主客転倒ということになってしまっているのではないか」と思いつつも、それはそれで許せてしまう。ロボットにお掃除をしてもらうのはうれしいけれど、ほんのすこし手助けになれているという感覚も捨てがたい。

このロボットが袋小路に入り込むことのないように、テーブルや椅子を整然と並べなおす。もっと動きやすくしてあげようと、観葉植物の鉢などのレイアウトを変え、玄関のスリッパをせっせと下駄箱に戻す。そうしたことを重ねていると、なんだか楽しくなってくる。そして、いつの間にか家のなかは整然と片づいていたりする。

いったい誰がこの部屋を片づけたというのか。わたしが一人でおこなっていたわけではないし、このロボットの働きだけでもない。一緒に片づけていた、あるいはこのロボットはわたしたちを味方につけながら、ちゃっかり部屋をきれいにしていたとはいえないだろうか。

「b」、部屋の隅のコードを巻き込んでギブアップしてしまう、床に置かれたスリッパをひきずり回したり、段差のある玄関から落ちてしまうとそこから這い上がれないというのは、これまでの家電製品であれば、改善すべき欠点そのものだろう。

「c」どうだろう。このロボットの（弱さ）は、わたしたちにお掃除に参加する余地を残してくれている。あるいは一緒に掃除をするという共同性のようなものを引きだしている。くわえて、「部屋のなかをすっきりと片づけられた」という達成感をも与えてくれる。③ なんとも不思議な存在なのである。

ただ壁にぶつかって進行方向を変えていただけなのに、結果として部屋のなかをまんべんなくお掃除してしまう。Xはたして、このことをかしい振る舞いととらえてしまっているものなのか。夏の終わりに、ある学生たちとおこなった（ロボット）のデザインをテーマとしたワークショップの様子を紹介してみよう。手がかりとするのはお掃除ロボットならぬ、冒頭の《蟻》の振る舞いである。

「この絵を見てください……」とパワーポイントで一枚の絵を映しだしてみる。砂浜の上を歩く、一匹の蟻の絵である。よく見ると、砂浜には蟻の残した足跡が延々とつづいている。

「蟻の足跡というのは、砂浜の上に残るものかどうかは怪しいのですが、こんな足跡が残されていたというわけです。よく見てみると、ちょっと複雑な絵模様を描いている。なぜ蟻はまっすぐに自分の巣に戻るうとしないのでしょうか？ この蟻の足跡がこんなに複雑な絵模様を描くのはどうしてなのか、ちょっと考えてみてください……」

学生たちはめいめいのスマートフォンに向かいながら、思い思いの考えをLINEに書き込みはじめる。そうして、いつの間にかワークショップの雰囲気もIIでくる。

「えっ、どういうこと？ どうして蟻の話なの？」

「まあ、ちょっと考えてみてよ！」

「この蟻さん、お腹が空いてんじゃないの？ それでフラフラ歩きなんだよ」

「そうそう、あつちにフラフラ、こつちにフラフラ（笑）」

「いま夏でしょ、それでこの蟻さん意識もうろうとか」

「アリさんって黒だよ、【d】人よりも暑く感じるのかも」

「蟻って暑さを感じるんでしょうか。蟻さんも汗かくの？」

「蟻のからだってちっちゃいからなあ、歩くのも命がけだよ」

早速、誰からともなく生まれてきたのは、この蟻の状態についての指摘であった。きっとお腹が空いているからなのではないか、それでフラフラした足跡になったというわけだ。それに触発されてか、日差しが強くて砂浜の上も暑いから、それでフラフラなのではないのかと、その原因を夏の暑さに求めはじめた。

あ ことを「帰属させる (attribute)」と表現することがある。これは「せっかくだから、なにかのせいにしてしまおう」という感覚だろうか。

ここで④ リユウイしたいのは、わたしたちは目の前にある対象の振る舞いを引き起こした要因を探るとき、その対象の側で起こっていることに帰属させやすいということだ。「なぜフラフラなのか」に対して、「この蟻はきっとお腹が空いているのではないのか」とは、すなわち蟻の内部にその原因を求めている。

だんだんと蟻の立場になって考えようとするのもおもしろい。「そういえば、蟻さんは黒いから、暑さを人一倍感じるのかも」と。こうしたときは、自分のいまの状態を手がかりに相手の状態をIII量っていることも多い。たまたま、この学生はお腹が空いていた、あるいはこのところの夏の暑さを気にしていたのだろうか。

「地面が柔らかくて、歩きにくいんじゃないのかなあ」

「なにか考えながら歩いてるんじゃない、きっと。うつむきながら」

「より歩きやすい道を考えながら歩いているんだと思います！」

「歩きやすい道を選んで歩く蟻って、すごいよね」

「そういえば、まっすぐに歩く蟻ってみたことないなあ」

「そうか、まっすぐに歩く蟻がいたらおもしろいかもしれない！」

「エアコンの効いた部屋を歩かせたら、意外とまっすぐに歩くかもね」

いつの間にか、学生たちが⑦ナカバ蟻になりきっている。わたしはどうしてこのような歩き方をしてしまったのか。自分の立場から考えるとき、今度はその要因を自分のうに求めていることに注意したい。「どうしてそんなことをしてしまったの？」と尋ねられたとき、ほんとうは自分に原因があったにもかかわらず、そのときの暑さのせいにしてしまうような感覚である。「地面が柔らかくて、歩きにくい」というのは、行為者としての蟻の立場に立つてのコメントだろう。

新たに⑧テキキされた「より歩きやすい道を考えながら歩くんだよ」という仮説もなかなかおもしろい。自分だったら、どうするのか。起伏の多い砂の山をどのようにして歩くのか、そういう立場に立つなら、より歩きやすい道を歩くにちがいないと。

と同時に、学生たちは蟻の複雑な足跡の要因を探る探求者としての立場を忘れてはいない。この仮説はどのようにしたら⑨ケンシヨウでできるものなのか。平らなところを歩かせたら、意外にも蟻はまっすぐに歩くのだろうか。「e」、エアコンの効いた部屋を歩かせたら、フラフラした歩き方ではなくなるのだろうか。そんな仮説を確かめるための手段に思いが移っているのだ。

「食べ物を探していたとか」

「蟻って、触角をピコピコさせて歩くよね。あれってどんな感覚なのかなあ」

「あの触角ピコピコって感じいいよね」

「昆虫って宇宙人！」

「そう、宇宙人！ 人間とおんなじ大きさのバッタがいたら手も足も出ない！」

「暗闇を手探りで歩く感じって、あの感覚だよね……」

こうした気楽な会話では、話題も意外な方向へと展開していく。「食べ物を探していたとか」というなにげないアイデアに触発され、食べ物を探しまわる蟻の触角の話題となり、「昆虫って宇宙人だよ」というイメージに飛び火した。そこから、「あの複雑な足跡は暗闇を手探りで歩くような感じで生まれたのではないか」というアイデアを生み出すことになった。はじめから意図されたものではないのだ。いくつかの視点やアイデアが折り重なるようにイメージが更新されていく。ゆきあたりばったりな雰囲気の中で、対象についての認識をすこしずつ育てている。

「蟻さんは視覚が発達してないから、匂いを頼りに歩いているんじゃないの？」

「そうそう、ニオイ！ むかしフェロモンっていう話を習ったような……」

雑談を楽しむだけでなく、すこし学術的な視点も入り込んできた。以前に生物の授業なかで学んだ知識を⑩ドウインして、もっともらしい答えを探そうとする。この先は、⑪センモン書を⑫IV 寄せないとほんとうの答えには届きそうもない。

この砂浜を歩く蟻の足跡についての挿話は、認知科学や経済学の分野で活躍したハーバート・サイモンの著した『システムの科学』という本のなかに登場するもので、「サイモンの蟻 (Simon's ant on the beach)」と呼ばれている。

砂浜の上を歩く蟻の残した足跡は、なぜ複雑な絵模様を描くのか。なぜ蟻は自分たちの巣に向かって、まっすぐに歩いていかないのか。このシンプルな問いを通して、サイモンはどんなことを伝えたかったのだろうか。

わたしたちは目の前の出来事を観察し考察しようとするとき、その対象からすこし離れて^④鳥瞰的な視点をとることが多い。「俯瞰する」ともいうように、そのほうが物事を客観的にとらえやすいためだろう。ただ^④鳥瞰的な視点には盲点もともなうようなのだ。

先に触れたように、砂浜を歩く蟻の姿を鳥瞰的な視点から眺めるとき、「この蟻は疲れて、フラフラだったんじゃないのか」「いや、道に迷ってしまったんだよ」と、複雑な足跡を残した要因を、蟻という個体に一方的に帰属させて考えやすい。あるいは、「まあ、蟻といえども、その姿を顕微鏡で調べるならば、宇宙人のように複雑怪奇なものだろう。そういう複雑な身体から生みだされる行為が複雑なものなすける」と、その要因を蟻の内部の構造の複雑さに求めようとする。とりあえず動くものに目を奪われてしまうことから生じる、わたしたちの帰属傾向（あるいは、もう一步踏み込んでいうならば帰属錯誤）といえる。

こうした解釈に対して、サイモンの指摘はほんのすこしわたしたちの意表を^Vものだ。なぜ複雑な絵模様を描くのか。サイモン曰く、「この蟻の行動の軌跡の複雑さは、必ずしも蟻内部の複雑さを反映したものではないだろう。むしろ、その多くはその蟻を取り巻いている環境の複雑さを反映したものではないのか」と。

いわれてみれば、なるほどそうか……と思う。砂浜の凸凹を回避しようと歩いていたら、結果として複雑な足跡を残したにすぎない。ある視点からとらえなおすならば、複雑そうに見える蟻の行動ももっとシンプルな仕組みで動いているのかも

しれない。わたしたちは必要以上に複雑なものにとらえすぎていたのではないか。サイモンが伝えたかったことの一つは、こうしたことなのだ。

学生たちの議論の後半では、そんな蟻の視点からの考察も芽生えていた。「地面が柔らかくて歩みにくいのではないか」「より歩きやすい道を考えながら歩いていたのではないか」という指摘である。

もちろん、蟻の足跡の複雑さを、それを取り巻いている環境の複雑さだけで説明するには無理があるだろう。「より歩きやすい道を考えながら歩いていたのかどうか」は、蟻本人に聞いてみないことにはわからない。けれども、砂浜の凸凹などの環境の複雑さとそこを歩く蟻の動きとが一緒になって、結果として複雑な足跡を残した。その意味で、蟻の個体としての機能やそれを取り巻く環境のどちらか一方に要因があるというより、その二つのあいだにわかし持たれたものともいえるのだ。

こうした観点から、わたしたちの身の回りのことをもう一度とらえなおしてみてもどうかと思う。その一つは、先に述べたお掃除ロボットの行動様式だろう。

わたしたち（＝観察者）の視点からは、ロボットは周囲の障害物を避けながら、なにか懸命にお掃除しているように見えた。^E「甲斐甲斐しく」「健気に」「ちょっと疲れたように」と形容したように、その働きぶりを生みだす要因をいつの間にかロボット内部の働きに帰属させていたのだ。しかし、^⑤行為者としてのロボットの視点に立つならば、目の前に迫り来る椅子や壁を避けるようにして動いていたら、結果として部屋のなかをまんべんなく掃除してしまっただけともいえる。

では、「部屋のなかをまんべんなくお掃除する」という能力はどこに備わっていたのか。それをこのロボットの内部に一方的に求めるわけにはいかない。一方でロボットを取り囲んでいる周りの働きだけでもない。その能力は、ロボットとそれを取り巻く環境とのあいだにわかし持たれていたと考えるべきものだろう。

ところで学生たちとの会話には、その続きがあったのだ。もうすこし、その先を見ておこう。

「それはそうと、このワークショップのテーマはなんだっけ？」

「蟻には蟻の人生が……っていう。ちがうか」

「なんか、ロボットのデザインだったはず……」

「いいのいいの」

「このLINEでの会話、他の人が見たらすこい妙なものに見えるだろうね」

「なんか、いい加減なことばかり話してるからなあ」

「あつ、このやりとり、なんか^⑥蟻の足跡にみえてきたんですけど」

「えっ？ 蟻の足跡!？」

「おーすごい、これは蟻の足跡だ！」

ゆきあたりばったり……。 「自分の力だけでなんとかしたい」というこだわりを捨てて、ときには周囲の状況に身を委ねてみる。 なにか「いい加減な……」という印象を持たれやすい言葉だけれど、どこか捨て難いもののように思われる。 なげなく街のなかを歩く、とりあえず手を動かしてみる。 この「委ねる」「委ねてみる」というスタンスがその周囲にある働きを上手に引きだし、一緒にになにかを生みだしているようなのだ。

わたしたちの言葉や発話などもそうだろう。 自己完結した、ハキハキした表現や意見を求められやすいのだけれど、とき

にはナカバ他に委ねたような側面も必要に思える。 いい加減にも思えるような暫定的な言葉が新たなアイデアを生みだすキッカケともなっている。 その意味で、他の参加を上手に引きだし、一緒に意味を生みだしていくような、そうした「余地」や「余白」も必要なのだ。 わたしたちはお掃除ロボットの気ままな行動やその〈弱さ〉にまんまと振り回されてしまっていたけれど、この〈不完結さ〉や〈弱さ〉のもつ可能性について、すこしずつ探っていきたいと思う。

（岡田美智男『弱いロボット』の思考 わたし・身体・コミュニケーション ―一部改変― による）

⑥ ワークショップ……参加者が自主的に活動して、課題に取り組んだり、意見を交換したりする集まり。

LINE……スマートフォンやパソコン上で複数の他者とメッセージのやり取りをすることができるアプリケーション。

認知科学……生物やコンピュータシステムの情報処理活動を対象として、その仕組みや知能の性質を理解しようとする学問分野。

問一　　〰線㉞㉟の片仮名を漢字に直しなさい。

問二　　〰線㉠「健気さ」・㉡「無造作に」・㉢「袋小路に入り込む」・㉣「鳥瞰」・㉤「甲斐甲斐しく」の本文中の意味として適当なものをそれぞれ次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

㉠「健気さ」

- ア　不幸な境遇にあっても力強く働いている様子
- イ　力が弱くとも困難な状況で立派に振る舞う様子
- ウ　他者からの視線を気にせず懸命に取り組む様子
- エ　逆境をものともせずにくましく行動する様子
- オ　妥協することなく誠意をもって対応する様子

㉡「無造作に」

- ア　無分別に
- イ　無神経に
- ウ　無頓着に
- エ　無邪気に
- オ　無慈悲に

㉢「袋小路に入り込む」

- ア　ものがたりが行き詰ること
- イ　道を間違えて迷子になること
- ウ　状況判断ができなくなる事
- エ　取り返しがつかなくなる事
- オ　本来の目的を見失うこと

㉣「鳥瞰」

- ア　冷静に観察すること
- イ　あたりを見回すこと
- ウ　全体を見渡すこと
- エ　熱心に眺めること
- オ　周囲を見くくすこと

⑤「甲斐甲斐しく」

- ア 雑用を片づける様子がてきぱきとしていて
- イ 課題を解決する様子がのびのびとしていて
- ウ 仕事をこなす様子がきびきびとしていて
- エ 問題へ向き合う様子がさばさばとしていて
- オ 作業を進める様子がだらだらとしていて

問三

「a」「e」に入る言葉として適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ところが イ それとも ウ あるいは エ そもそも オ だから

問四

I V にあてはまる語として適当なものを次の語群からそれぞれ一つずつ選び、必要があれば適当な形に直して答えなさい。

- 語群 たぐる 遂^とげる 推^おす 和^わらぐ 突^つく

問五

——線①「これまでの家電とはどこか趣がちがうようだ」とありますが、お掃除ロボット（ヘルンル）は「これまでの家電」とどのような点においてちがいますか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が操作しなくても自律的に動くことができるので目が離せなくなる点。
- イ 人間を手助けする存在である家電が頼りなく感じられてかまいたくなる点。
- ウ 従来の家電よりも優れているのでその機能をより詳しく知りたくなる点。
- エ 家電としての機能を十分に果たすことができなので手伝いたくなる点。
- オ 仕事をしているのに失敗ばかりが目につくのでいたずらをしたくなる点。

問六 — 線②「主客転倒」とありますが、これはどういうことですか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来は道具であるロボットが人間を助けるべきなのに、人間がロボットのことを手伝っており、使う者と使われる者との関係性が入れ替わっているということ。

イ 部屋の掃除を完了するという目的は一致しているのに、作業が滞りがちになっており、指示を出す者も作業をする者ともに被害を被っているということ。

ウ 掃除の効率性を高めるためにロボットを使用しているのに、ロボットの手伝いをすることで効率が悪くなっており、意図とは逆の結果になっているということ。

エ まず人間がある程度環境を整えてからロボットを起動するべきなのに、ロボットを起動してから手助けをしており、行動の順序が逆になっているということ。

オ 部屋をきれいにするためにロボットを使っているはずなのに、ロボットの相手をする事で頭が一杯になっており、当初の目的が忘れられているということ。

問七 — 線③「なんとも不思議な存在なのである」とありますが、なぜお掃除ロボット（ルンル）は筆者にとって「不思議な存在」だと言えるのですか。その理由として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間に手助けをしてもらうという斬新な発想を取り入れることによって高度な作業を行っているから。

イ 家電としての改善点を抱えているのに、人間の同情を買うことで目的を達成することができているから。

ウ 一見すると効率の悪いやり方で掃除をしているようだが、最終的には部屋の掃除を完了しているから。

エ 機能的な欠陥があるために、人間の協力がなければ目的を全うできない道具として存在しているから。

オ 従来の家電であれば問題点となる要素が人間の行動を促し、それによって人間を満足させているから。

問八 あに入る内容として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 起こった現象の原因を考察する

イ 無理やりに理由をつけて筋を通す

ウ 結論に至るまでの経緯を分析する

エ ある出来事の要因をなにかに求める

オ 失敗した罪を誰かになすりつける

問九 い・うには対となる言葉が入りますが、その言葉をそれぞれ漢字一字で答えなさい。

問十 ― 線④「鳥瞰的な視点には盲点もともなうようなのだ」とありますが、筆者がその「盲点」の内容を説明している一文を探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問十一 ― 線⑤「行為者としてのロボットの視点に立つならば、目の前に迫り来る椅子や壁を避けるようにして動いていたら、結果として部屋のなかをまんべんなく掃除してしまっただけともいえる」とありますが、このような視点は、お掃除ロボットの働きぶりを生み出す要因をどのように考えたときに生じますか。次の文の に入る言葉を本文中から六字で探し、ぬき出して答えなさい。

ロボットの働きぶりの要因を に帰属させて考えたとき。

問十二 ― 線⑥「蟻の足跡」とありますが、これについて次の i・ii の各問いに答えなさい。

i この学生はどのような意味で LINE での会話を「蟻の足跡」にたとえていますか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人では解決することができないような難問に対して大勢で丸となって取り組んでいるという意味。

イ 難解なテーマに対して自分たちの話しやすいことから始めて、堅実に目的地に向かっていくという意味。

ウ 結論に向かって一直線に進むのではなく、様々な所に寄り道をしながらも少しずつ進んでいるという意味。

エ 誰かが計画的に会話を進行しているのではなく、各学生が協力し合って会話を展開しているという意味。

オ 冷静になって振り返ってみると、ゆきあたりばったりで非常に的外れな会話が進行しているという意味。

ii この LINE での会話を「蟻の足跡」にたとえたとき、会話の中のひとつひとつのアイデアはどのような要因によって生じたと考えられますか。解答欄の形に合わせて三十五字以内で説明しなさい。

問十三 ― 線 X「はたして、このことをかしこい振る舞いにとらえてしまっていないものなのか」とありますが、この問いに対する返答を次のア～オのように考えました。本文の全体を踏まえた返答として適当だと考えられるものをその中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 従来の家電と違って人間の協力を引き出すことによって、より難度の高い作業を完了しているので、部屋の掃除をすることができたのはロボットの性能の高さゆえであると言える。

イ ロボットが人間の協力を得ることを計算に入れて製造されているかどうかは確認するすべがないので、部屋を掃除することができたことをかしこい振る舞いであると断言することはできない。

ウ 道具は達成すべき目的に合わせて作られるものだが、このロボットは自力では部屋の掃除を完了することができていないので、ロボットの振る舞いをかしこいものとして肯定することはできない。

エ ロボットが部屋の中を掃除することができたのは、部屋の環境や人間の手助けとロボットの機能が影響し合った結果であるので、ロボットだけが掃除をしたと考えるのは妥当ではない。

オ ロボットは家電として機能的に問題点を抱えており、人間が掃除に参加しないと作業を完了できないので、部屋を掃除することができたのはむしろ人間のかしこい振る舞いによると言える。

問十四 〓線Y「〈不完結さ〉や〈弱さ〉のもつ可能性」とありますが、これについて次のi・iiの各問いに答えなさい。

i 筆者の研究室では次のようなロボットが開発されました。次に挙げる三つの特徴から、このロボットの「〈不完結さ〉や〈弱さ〉」を明らかにしたうえで、それがもつ「可能性」を説明しなさい。なお、このロボットは次に挙げられている機能しかもたないこととします。

特徴 ① このロボットの大きな構造は、上部はかご、下部はそれをのせる車体となっている。

② 落ちているゴミを自ら発見し、そのそばまで移動する。

③ 落ちているゴミのそばでかごを揺らす動作をする。

ii ロボットやAIの技術は今後も急速に発展していくだろうとされています。その一方で、進化したロボットやAIが人間の仕事の大部分を肩代わりするようになることで、人間の仕事が大幅に減少してしまい、経済活動に多大な影響を及ぼすことが懸念されています。そのような時代の中で、ロボットの「〈不完結さ〉や〈弱さ〉」はどのような状況をもたらし、人との関わりの中でどのような役割を果たすことが期待できると考えられますか。自分の考えを説明しなさい。

問十五 次のア～エについて本文の内容に合致するものには「○」、合致しないものには「×」で答えなさい。

ア 人間は他者と協力することに喜びや満足を感じる生き物なので、生物でないロボットに対しても思いやりをもつて接するべきである。

イ LINEでの学生の会話は投げ遣りな会話から始まっていたが、徐々に学術的な要素が含まれるようになったことでより有意義なやり取りに発展した。

ウ 人間は動くものに注目しやすいという傾向があるので、自らの偏見や先入観を離れて物事を観察しようとする場合、周囲の状況にも意識を向ける必要がある。

エ 他者との関係において「余地」や「余白」が必要なのは、それが他者からの関わりを促す要因となり、一人では生みだせない何かが生まれる可能性があるからである。

受 験 番 号

氏 名

得 点
点

[illegible]